中国近世における博文約礼解と知行論（一）

中根公雄

はじめに

本稿は、博文約礼にる纏わる諸問題を朱熹『論語集注』の見解と王守仁『王陽明全集』の見解を楕円の二定点とし、その枠内の思想家群の諸見解を視野に入れつつそれらの異同を比較検討してみることにする。

「博文・約礼」はもとより『論語』の語である。その所出箇所は一つは雍也篇の「子曰、君子博学於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫」であり、またもう一つは、子罕篇の「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以礼。欲罷不能。既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲従之、末由也已」に見ることができる。(1) 前者の場合、行為主体は君子という普遍的な意味での学ぶ者であり、後者の場合は、顔淵という個人であるから、具体的な方法としては、雍也篇と子罕篇との照合という形で論を進めねばならない。何故ならば二つの篇に対するいくつかの解釈を照合する際に、例えば雍也篇内に於て既に子罕篇内の顔淵の曰う「博我以文、約我以礼」について触れて対比している見解が存在しているからである。

一

まずは楕円の二定点の一つ、朱熹からはじめる。

雍也篇君子博学於文章に関する見解

約は要なり、畔は背なり。君子の学は其の博からんことを欲す、故に文に於て考へざること無し。守るに其の要なるを欲す、故に其の動くに必ず礼を以てす。此くの如ければ、即ち以て道に背かざるべし。○程子曰く、博く文に学ぶも之を約するに礼を以てせざれば、必ず汗漫に至らん。博く学び、又能く礼を守りて規矩に由れば、即ち亦以て道に畔かざるべしと。（論語集注）

子罕篇顔淵喟然歎章に関する見解

循循は次序有る貌、誘は引進なり。博文約礼は教の序なり。言ふこころは夫子の道は高妙と雖も、而も人に教ふるに序有るなり。侯氏曰く、我を博むるに文を以てすとは、致知格物なり。我を約するに礼を以てすとは、克己復礼なり、と。程子曰く、此れ顔子の聖人を称する最も切当の処なり。聖人の人に教ふる、惟此の二事のみ、と。（同前）

二つの見解を合わせて朱熹による博文約礼解を考えてみると、朱熹は、実質的具体的な学による知の獲得の後に、客観的な社会秩序の中に於てその獲得した知をひきしめる行動をすることで、人間社会に於ける実践道徳の維持を主張している。『朱子語類』巻三十三「君子博学於文章」には

行夫博文約礼を問ふ。曰く、博文の條目多し。事事着き去きて理会せよ。礼は却て只だ是れ一箇の道理のみ。視も也た是れ這の箇の礼、聴も也た是れ這の箇の礼、言も也た是れ這の箇の礼、動も也た是れ這の箇の礼なるが如し。若し

文に博きも之を約するに礼を以てせざれば、便ち是れ帰宿の処無し。書を読み、詩を読み、易を学び、春秋を学ぶが如き、各自に一箇の頭緒有り。若し只だ去きて許多の條目の上に工夫を做すのみにして、自家の身己都て帰着無ければ、便ち是れ道に離れ畔くなり。〔恪〕

という。文とは、その顕然なる者として具体的には『書経』『詩経』『易経』『春秋』などをさし、礼とは、博く学んだ文に於いて眼前に道理を理会して、自己の言動の際に是否を別ち、勿論その実践的行為を是に帰着させる規範をさしている。言葉を換えて言えば、外からの知識と外への実践という意味での自己の内と外との問題意識である。また、

博文約礼は、聖門の要法なり。博文は諸を事に験する所以、約礼は諸を身に体する所以なり。此くの如く工を用ふれば、即ち博き者は以て中を択びて之に居りて偏ならざる可く、約なる者は以て物に応じて動に皆則有る可し。此くの如ければ、則ち内外交も相ひ助けて、博は氾濫して帰する無きに至らず、約は流遁して中を失ふに至らず。〔大雅〕

とあるのは、内と外、即ち自己の内面と外に表れる言動、ひいては主体と社会との一貫性を外的修養法として説いている。此所での視点は、博文から約礼へと段階的にみるよりもどちらかと言えば、博文と約礼との一体性を見ている。

以上のような順序次第を修養論の方法に見い出しながら、又一面に於て一体性を主張する見解の展開は、換言すれば朱熹の思想解釈上、一つの特徴ともなる。一個の存在に於て、一方で自己の学問を広く修めることが前提になり、その内容として修養することが目的となり、また他方で学問の方法と修養の内容とが一つに集約される。勿論社会に於ける存在という観点まで敷衍して考えるならば、自己修養と社会倫理との問題となる。

朱熹のこうした思想的特徴を踏まえながら、博文約礼に対する解釈をより深く考察していくことにしよう。

二

さて前の雍也篇君子博学於文章の『集注』圏外の程子の説の原型は、『論語精義』に明道曰として

博く文に学ぶも之を約するに礼を以てせざれば、必ず汗漫に至らん。所謂る之を約するに礼を以てする者は、能く礼を守りて規矩に由るも、未だ之を知るに及ばざるなり。止だ以て道に畔かざるべきのみ。多く聞き其の善なる者を択びて之に従ひて、多く見て之を識（しる）すは、知の次なり[2]、とは、此れと相近し。顔淵曰く、我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす、罷まんと欲すれども能はず、とは、是れ已に之を知りて進みて止まらざる者なり。

と見えるものである。『集注』圏外にあっては、最初の十五字を採ったのみで、残る大部分を刪り、代わりに「博学矣、又能守礼而由於規矩、則亦可以不畔道矣」と、朱熹自身の立場で整理した。その意味するところを問題としよう。

此の所業に関する朱熹自身の見解は『語類』に見ることができる。

問ふ、明道言ふ、博く文に学ぶも、之を約するに礼を以てせざれば、必ず汗漫に至らん。所謂る之を約するに礼を以てする者は、能く礼を守りて規矩に由るも、未だ之を知るに及ばざるなり、と。既に能く礼を守りて規矩に由るに、之を未だ知るに及ばずと謂ふは、何ぞや、と。曰く、某は亦此くの如く説くを愛せず。程子は我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てすを説きて、已に知ると為すも、知を将て説くを須ひざるも亦可なり。顔子も亦只だ是れ這の箇の博文約礼なり。但だ此の説は較や粗し、顔子の説く所は又上に向ふ。然れども都て這の工夫従り做し来る。学ぶ者は只だ此の両端のみ、既に能く文に博して、又会に礼に約すべし、と。問ふ、礼に約するは只だ是れ其の博する所の者を約するや否や、と。曰く、亦此くの如く説くを須ひず。未だ知らざる所有れば、便ち其の知を広め、須ら

く是れ博く学ぶべし。学既に博ければ、又須らく当に約礼すべし。礼に約するに到れば、更に何の事か有らん。守る所は此の理に在るのみ。〔寓〕（巻三十三）

削去した理由は、「知」を持ち出して論じているからだ、という。程顥（一〇三二―一〇八五）の論、即ち「能く礼を守りて規矩に由る」ことを、述而篇に「多聞択其善者而従之、多見而識之、知之次也」とある「知の次」に想定し、顔淵が博文約礼の工夫を「博我以文、約我以礼、欲罷不能」と言う「罷めんと欲するも能はざ」る境地を、「已に之を知りて進みて止まらざる」こととして、「能守礼而由規矩」よりも高い次元の、本質的な「知」と認識したところに、朱熹の好まざる理由があった。その傾向を再確認する為には、『語類』の次の資料も有効である。

或ひと博く文に学び、之を約するに礼を以てすれば亦た以て畔かざる可し、を問ふ。曰く、博学は是れ致知、約礼は則ち徒らに知るのみには非ず、乃ち是れ践履の実なり。明道は、此の一章と顔子の博文約礼を説けるの処と同じからずと謂ひ、顔子の約礼は是れ要を知ると謂ふも、恐らくは此の処偶ま見得て未だ是ならざらん。約礼は蓋し但に要を知るのみには非ざるなり。此の両処は自ら分別するを必せず。〔時挙〕

朱熹からすると程顥のような観点は、悟道的覚悟的な修養を思わせ、礼に集約するために具体的に広く知識を得る文に学ぶという実際の工夫の意識が感じられないからであろう。しかし朱熹は道を知りながら同時に実行することを否定するものではない。あくまでも朱熹の場合、学問方法の次序という立場より言うとき、博文してから約礼へ一貫して進むのであって、修養の目的内容として博文と約礼とは相い離れず、その意味で顔淵の曰う博我以文、約我以礼と本質的に同じなのである。

一方、程頤（一〇三三―一一〇七）は顔子に於ける博文約礼を解して『二程遺書』（伊川先生語第四）または『論語精義』

に、

我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てすを問ふ。曰く、此れ是れ顔子の聖人を称する最も切当の処なり。聖人の人に教ふるは只だ是れ此くの如し。既に之を博むるに文を以てして、而して後に之を約するに礼を以てす。所謂[3]博く学びて詳かに文を説くは、将に以て反て約を説かんとするなり。博と約とは相ひ対す。聖人の人に教ふるは只だ此の両字のみ。博は是れ博く学び、多く識り、多く聞き、多く見るの謂ひ、約は只だ是れ之をして要を知ら使むるなり。

と言う。此処では、顔子の本質は、聖人と称するにまさに値するものという観点より見ている。聖人から学ぶ（教えられる）者からすれば、博文という、広く学ぶ、即ち多く識り、多く見聞することが前提となって、約礼という、学識聞見の要を知る即ち個々の知識の総括的な実現となる。また聖人が人に教える博文と約礼とが、功夫上は対照的に意識されるが、不即不離の関係にあるという意味で相対するのである。では一般的に学ぶ者を程頤は如何に見ているだろうか。続けて「君子博学於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫」を「博我以文、約我以礼」と比較して同じか否かの問に、

這箇は只だ是れ浅近の説なり。言ふこころは多く聞見して約束するに礼を以てせば、未だ道を知ること能はずと雖も、以て道に畔かざるべきに庶幾しと。此れ善人君子は多く前言往行を識りて、能く非礼を犯さざる者を言ふのみ。顔子の孔子に学ぶ所以の謂ひに非ざるなり。

と答えている。前言往行を学ぶ段階と、孔子に学ぶ段階と、学ぶ主体に差異を考えた視点から論じ、「博学於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫」を君子、即ち一般に学ぶ者としてとらえている。また更に『精義[4]』には、

又曰く、君子は博く文に学び、之を約するに礼を以てすれば、亦以て畔かざるべきかなとは、此れ自得に非ざるなり。

勉めて能く守るなり。多く聞き其の善なる者を択びて之に従ひ、多く見て之を識すは、知の次にして、以て中人の学を勉むるなり。

と言う。博文約礼を中人即ち一般に学ぶ者が勉めて学ぶ方法とすることで、卑近な工夫として説いている。

程頤が、博文という為学の方法功夫により広く知識を得て、それよりして約礼という修養の方法功夫により自己の実行を道徳上つづまやかにしていくと説くことは、朱熹の見解へつながるものとしてうけとめられよう。また博文約礼解を説く立場を本質に於ける次元と、一般的に学ぶ者の功夫とに分けて考察することも朱熹の見解から否定されるものではない。しかし博文約礼する工夫に於て、本質的な知を問題とする自得する者と、見聞し之に従い守る者には、やはり距離が有ることを免れない。

朱熹は『論語或問』（雍也）の中で次のように述べている。

或るひと問ふ、程子之を約するに礼を以てするを以て約束の意と為す。而して顔子の歎に於て、則ち又約を以て要を知ると為すは、何ぞやと。曰く、愚意ふに二者の訓異ならず、其の義も亦同じ、皆約束の意と為る。但だ此の章に在りては則ち学ぶ者の分にして、顔子の至る所と同じからざること有りと為すのみ。程子の此の章に於けるの工夫の次序、地位の浅深、蓋し深く之を得たり。独だ顔子を論ずるの説は、則ち鄙意に未だ安らかざること有るのみ。

顔子の学ぶ境地であっても、一般に学ぶ者が多く聞見して約束する、即ち全体を総括的につづまやかにすることと同訓、同義となる。但し一般的に学ぶ者の立場から見ると、工夫の次序や次元の高低が存在し、学ぶ者に等級が生じる。顔子の至る所とは同じくない。従って朱熹からすると、聖人が人に要を知らしめるということは、言い換えればやはり実際に学ぶ者が要を知る、即ち深く顔子の本質を理解すると説くのは、約するに礼を以てすること即ち約束という功夫が、覚悟と

いう方向へ進む可能性を有するので、そこに不安を感じているわけである。

朱熹の学説は、大抵は程顥・程頤を受け継いで、特に程頤から強く影響を受けているとされる。此処での見解も、理想本質の立場と現実工夫の立場との二つの観点に於てみるという程頤の見解の立場を受けていると言うことができる。但し程顥・程頤に対しても、修養上の工夫として等をこえて覚悟に近いものを感じさせる見解には肯定しないということなのである。（未完）

注

（1）『論語』顔淵篇にも「子曰、博学於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫」とあり、『集注』では「重出」としている。雍也篇と照合すると「君子」の二字が無い。このことは、博文約礼という修養上の功夫をする主体は誰かを考える時は問題となると思われる。雍也篇は君子、子罕篇では顔淵、顔淵篇の場合は君子の二文字が無いことで、一般的に言ってという立場から解して、君子の意ともなろうし、また顔子まで含めた広い意味での学ぶ者ともなるであろう。

（2）『論語』述而篇、「子曰、蓋有不知而作之者、我無是也。多聞択其善者而従之、多見而識之、知之次也」『集注』には「不知而作、不知其理而妄作也。孔子自言未嘗妄作、蓋亦謙辞。然亦可見其無所不知也。識、記也。所従不可不択。記則善悪皆当存之、以備参考。如此者、雖未能実知其理、亦可以次於知之者也」とある。

（3）『孟子』離婁上に「孟子曰、博学而詳説之、将以反説約也」

（4）『二程遺書』は、第六「二先生語六」に載せている。

（5）参照（2）。『精義』に伊川の語として「伊川解曰、不知而作、妄作也。聖人固無所不知也。在衆人雖未能知之、若能多聞択善而従、多見而記識之、亦可以次於知之者也」をみることができる。

（6）『論語』雍也篇、「子曰、中人以上可以語上也。中人以下不可以語上也」

（本学東洋学研究所副手）